

# 公益社団法人調布青年会議所 2017 年度理事長所信

理事長 瀧柳 伸央

スローガン 伝えようこの街の魅力を ～縦と横の繋がりを生かして～

## 1 はじめに

私が住む調布市は年々姿を変えています。多くの農地が住宅やマンションに姿を変え、渋滞を作っていた狭い道路が都市整備計画に伴い、市内の南北を縦断する道路の一部となりました。2000 年には、市内に大きな競技場が建設され、プロスポーツチームの試合やコンサートが定期的開催されるようになり、多くの人がこの街を訪れるようになりました。現在、調布駅は地下化され、駅の跡地には大型の商業施設ができようとしています。また、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、新たな競技施設の工事が進んでいます。2019 年のラグビーワールドカップ、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックなど、世界的なスポーツイベントが訪れようとしているこの街には、たくさんの期待と希望があります。

駅前の再開発が進む一方、市内にはまだまだ多くの自然が残されています。市内を横断する多摩川や野川には多くの動植物が生息し、武蔵野の雑木林には、湧水と春の若葉の鮮やかな緑、夏の暑さをしのぐ木陰、秋の紅葉、冬の落葉など、訪れる人に日本ならではの季節を感じさせてくれます。

人は誰もが様々な形で「原風景」持っていると思います。原風景とは、人の心の奥にある最初の風景のことで、それを見たとき、人は懐かしさや心の落ち着きを感じるそうです。私の原風景は自宅のすぐそばにある野川と国分寺崖線です。曲線を描きながら西から東へ流れる野川、その後ろに沿うように連なる国分寺崖線、そして所々に残る武蔵野の雑木林。私はこの景色を見ると心が落ち着きます。

調布はたくさんの期待と希望を感じる都市機能と人々の心落ち着かせる自然、この両方が融合したとても魅力的な街です。本年度はこの街の魅力を一人でも多くの人に伝えられるよう青年会議所の運動を展開していきます。

## 2 中長期ビジョンの実現に向けて

調布市は 2019 年のラグビーワールドカップ、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催地に決定しています。多くの観光客が訪れる両大会の間中は、調布市の魅力を伝える絶好の機会です。地元・調布の青年会議所として街の魅力を伝え、安心して訪れてもらえるようなまちづくりにいかに貢献できるのか。世界中から多くの人を訪れるこの機会に向けて、「調布に恋する市民があふれるまち」「世界に誇れる調布」を実現させるため、

様々な事業を提案していかなければなりません。

### 3 街の魅力を伝えるスポーツツーリズムの振興

現在、観光庁では、地域の特性を生かし、かつ多様化する旅行者のニーズに合わせた観光を提供するニューツーリズムの振興を図っています。そのひとつがスポーツツーリズムです。スポーツツーリズムは、さまざまな形でスポーツイベントを楽しむだけでなく、イベント開催先の文化的な資源や地域の人々との交流を含んだ観光を楽しむスタイルのことです。

2019年に開催されるラグビーワールドカップは、過去三回の平均観客動員数が200万人を上回るビッグイベントです。また、1チームにつき1週間に1試合しかが行われられないため、開催期間が他のスポーツイベントより長く、観戦に訪れる観光客が試合の合間に都市を観光して回る傾向があります。調布市内はもちろん、東京中をじっくり観光できる時間があります。

では、日本全国、海外から訪れる観光客に対して調布のどのような魅力を発信すべきなのでしょう。調布は都心や空港からのアクセスがよく、市内には深大寺や神代植物公園などの観光地に加え、味の素スタジアム、その周辺のスポーツ施設、映画の撮影所、そして湧水が出る崖線、多摩川、野川といった自然空間など、人を集めることが出来るさまざまな施設や場所があります。

外国観光客のニーズ把握調査では日本の食、ショッピング、自然・景勝地観光が上位に、次いで日本の歴史・伝統文化体験、芸術鑑賞などがあがります。日本の古都・京都の観光客数は年間約5,700万人、外国人宿泊者数は前年比73%アップの316万人と年々増加しています。調布にも深大寺をはじめとした京都に勝るとも劣らない「和」の文化があり、観光客のニーズに応える観光資源は十分に揃っています。

効果的なスポーツツーリズムの振興のためには、2年後、3年後に開催されるスポーツイベントに向け、今から準備しなければ魅力を伝える時間が短く浸透しません。行政を巻き込みながら、我々のような地域の関係団体や、民間事業者が、自らの街の観光資源や自然環境、インフラの状況を改めて確認し、地域レベルで方向性を共有し、どのように各資源を生かしていくか議論し青年会議所として、街の魅力をどのように発信すべきか提案していきたいと思います。

### 4 未来へ向けた夢を抱く青少年の育成

スポーツには人の心を動かす力があります。ルールが分からなくても、何となくスポーツを観ていると感動したり、影響を受けた経験が誰にでも一度はあると思います。真剣な表情や一瞬たりとも気を抜かず一生懸命に取り組む姿勢に、人は心を魅了されてしまう、それがスポーツの力なのだと思います。

調布青年会議所には30年以上継続してきた青少年事業があります。皆さんご存知の「わ

んぱく相撲」です。勝ちたい一心で一生懸命取り組んだ結果、勝って泣き、負けて泣き、参加した選手たちには勝つことの喜びや負けることの悔しさだけでなく、さまざまなドラマが生まれます。毎年、来場した観客だけでなく、我々青年会議所のメンバーもすがすがしい気持ちで大会を終えるのは、このドラマを観て感じているからだと思います。一生懸命取り組んだから自分の意思とは関係なく、自然と涙が出てくる。それが人の心を掴みます。一生懸命取り組んだ結果、成功体験として得られる成長、そして失敗し、その失敗を繰り返さないで反省することから得られる成長。成長には様々なパターンがあります。それを手助けするのは親や身近にいる大人です。大人の接し方、言葉の投げ方次第で子供の成長が変わります。

近年、スポーツ心理学を取り入れたプロスポーツ選手、オリンピック選手の指導方法が注目されています。選手に目標を立てさせ、自分が何をすれば目標を解決できるかを自らが考えられるようにするメンタルトレーニングを実践した結果、世界で戦えるスポーツ選手を育成することに成功しています。その代表例が2015年のラグビー日本代表、リオオリンピック柔道日本男子代表の活躍です。指導者は、選手のやる気を奮い立たせるために「叱る」と「怒る」を区別し、試合前に投げかける言葉を選びました。メンタルトレーニングを通して、日本を代表する選手であることに誇りを持たせ、自信をつけさせ、自らが考えた目標を自分で解決する能力をつけることによって、試合中にピンチに陥った時、自らが判断し、ピンチをチャンスに変えることに成功したのです。大人が子供に接するときも同じではないでしょうか。自信を付けさせ、大きな目標を立てさせ、大一番で気持ちを高揚させる言葉を投げかける。そして成功した子供はその成功体験が励みになり、さらに夢を抱く。これはスポーツに限らず日常生活でも通じると私は思います。

昨年のリオオリンピックを観て、「僕もあの選手のようにになりたい」「僕も将来、あの舞台に立ちたい」と思い、夢を抱いた少年、少女がどれくらいいたでしょう。中にはまったく興味を示さない子供もいたと思います。しかし、2年、3年、時間をかけて伝えれば競技の魅力が伝わるのではないのでしょうか。一流のアスリートが集まる2019年、2020年に、地球の裏側ではなく、もっと身近であの感動興奮を体験すれば、子供が出場した選手に対しあこがれや尊敬する気持ちが芽生え、目標＝夢に変わると思います。本年度は、そのスポーツを通して、夢を抱くことができる子供を増やす事業を実施していきます。

## 5 新たな人材の発掘と LOM の結束力の強化

調布青年会議所の正会員数は年々減少しています。40歳で卒業を迎える青年会議所は常に新たな人が入らなければ、たちまち人数が減り、組織が衰退してしまいます。本年度は理事長である私が先頭に立ち、メンバー全員で正会員の拡大を推進していきます。調布青年会議所に入会してもらうためには、我々の運動についての情報発信の方法が重要です。魅力的な事業の開催だけでなく、ホームページや SNS 広報誌等の広報活動を充実させ、認知度を高めるような情報発信を徹底していきます。

また、近年、メンバー同士の交流、結束力が弱くなってきているように感じています。本年度はメンバー同士の交流を深め、お互いを知ることで、同じ目標を持った結束力の強い仲間を作り上げていきたいと思えます。また、メンバーには調布だけでなく日本全国で開催される青年会議所の事業に積極的に参加し、さらに東京、関東、日本の青年会議所に出向して、青年会議所にはさまざまな人間がいることを感じてもらい、それぞれが持つ特性をみて、自分に生かせるところ、学ばなければいけないところを見つけましょう。それが自分の成長にも繋がります。

## 6 次代につなげるための公益制度に対する理解の普及と組織再確認

調布青年会議所は 2012 年に一般法人から公益法人に移行し、今年で 6 年目を迎えます。しかし、今はまだ苦勞して取得した公益法人の持つ特性を生かし切れていません。青年会議所が考える「公益」と公益制度法人改革が求めている「公益」とは根本的な意味合いが異なっていたため、制度を遵守する代償として組織運営に支障をきたしています。公益法人とは何か。法人格を持つ利点や一般法人との違いは何なのか。苦勞して先輩方が取得した公益法人を何も生かせないまま、決められたルールを遵守しているだけでは、運動の活性化にはつながりません。本年度は、公益法人格を保持することで何ができるのか。行政や他の青年会議所へのヒアリングを行い、今後の方向性についてメンバー間での議論を重ねていきたいと思えます。

## 7 終わりに

私は青年会議所に入会するまで、自分が住む調布について、あまり深く考えることがありませんでした。明るい豊かな未来を作ろうという大きな目標を掲げ、街の問題点を考え、解決しようとするこの団体に入会し、自然と自分の街について真剣に考えるようになりました。近年、地域団体が「JC しかない」時代から「JC もある時代」に変わったと言われます。市内にはさまざまな団体が立ち上がり、多くの人たちが街のため、未来のために活動しています。

調布青年会議所には 46 年の歴史があり、先輩たちが築いてきた信頼があります。そして、他のどの団体にも負けない人脈があります。現役メンバーの横の繋がりを使い、街の問題点、活性化をする運動を起こし、行き詰まれば多方面で活躍されている 500 人を超える先輩方の縦の繋がりを生かし助言を求めることができます。

入会して 7 年、青年会議所を通じて出会った人たちとの繋がりや信頼関係、そしてそこから成り立つ交流の発展を今実感しています。一人で動くのではなく協力してくれる仲間が作れるのが、青年会議所の繋がりであり、強みです。この繋がりや信頼関係は青年会議所を卒業しても途切れることはありません。青年会議所で築いた縦と横の繋がりや信頼関係を生かし、この街をさらに魅力あふれる「世界に誇れる調布」にしていきましょう。